



澤田文一 「麦わら帽子の少女」

(会  
員)  
秋山功  
伊藤英一  
伊東總吉  
太田貞雄  
佐々木征  
佐藤裕幸  
杉野和夫  
鈴木忠男  
鈴木正道  
野口勉  
堀良慶

(敬称略・50音順)



安井隆 「蜜柑をむく女」



NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

# 第40回放談会

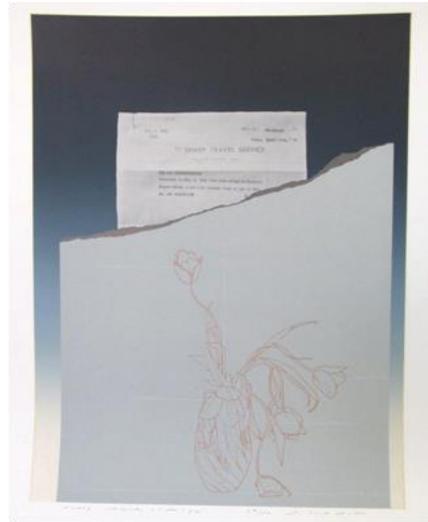


2015年1月5日(月) 13時～16時  
於 東京・京橋区民会館 洋室5号室

# 第40回放談会

1. 日時 2015年1月5日(月) 13時～16時
2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室5号室
3. 出席者(計11名、敬称略、50音順)  
<会員>秋山功、伊藤英一、伊東總吉、太田貞雄、佐々木征、佐藤裕幸、杉野和夫  
鈴木忠男、鈴木正道、野口勉、堀良慶
4. 司会進行:佐藤裕幸、書記:鈴木忠男、写真・編集制作:野口勉
5. 放談会(発表順)

## ① 伊東總吉



野田哲也 「日記 1972年3月13日」 Arches リトグラフ 7版  
ED.30 55.5×41.5cm 制作年:1972年

野田の作品は和紙を使うことが多い。(東京国際版画ビエンナーレ国際大賞を射止めた‘68のソファの両親を囲む家族を描いた作品も和紙である。)  
一般に白黒を基調としたその後の作品とは異なり、このアルシュ紙のリトグラフは7版を重ね、構図も工夫されていて枯れたチューリップのスケッチも書き加えるなど手が込んでいて版画創作の卓越した技法を使った佳作ではないかと考えています。

(参考) 野田哲也全作品(昭和53年2月1日(株)フジテレビギャラリー発行)

<談> 堀:珍品です。和紙は埼玉・小川のものです。佐々木:グラデーションが見事。  
太田:藍色がいいですね。

## ② 秋山 功



(裏面)



澤田文一「麦わら帽子の少女」油彩・キャンバス F0号 制作年：2013年

私が今、最も注目している画家のひとりに澤田文一がいる。澤田は1949年に札幌で生れたというから、私と同世代である。澤田自身は専門的な美術教育を受けていないようだがその夥しい素描などに触れると天賦の才を感じる。画家としての社会的スタートは二十代の半ば、1974年の二紀会の入選で翌年には第3回ブロードウェイ新人展新人賞2席を受賞している。作風は貧しさの中で必死に生きる人々や聖書やギリシャ神話の世界を哀感込めて描いた写実的な作品が多い。その迫真の表現は一部の画廊主や目利きに認められ、1980年代になってようやく注目されるようになった。しかし「時の人」になった矢先に忽然と姿を消し、その後20年あまりもの長きに渡り消息不明の状態であったという。

私が澤田の作品に初めて出会ったのは、再び作品を発表し始めた後のことである。銀座の裏通りで昭和の雰囲気を残す奥野ビルという画廊ビルの一角であった。そこでフォレスト・ミニという小さな画廊を運営する森弘幸さんは、若い頃に澤田文一の作品と出会い、その才能に惚れ込み支援していたという。そうした経緯もあって澤田は森さんを頼り、また創作を開始したようだ。

澤田の作品には人間の内面をえぐり出す凄さがある。清らかな「少女像」や聖書に材を得た「聖家族」など見るからに美しく清純な作品を描く一方、狂女や乞食など目を背けたくなるような醜い姿を、それ以上の迫力で表現している。私がオークションで落とした女性像の作品は送られてきた夜、ひとりで開封したのだが、画から発せられる「気」の力に身震いするほどの凄さを感じた。

美とは何か。澤田文一の作品を観ているとあらためてその本質を考えさせてくれる。「美」を表現しようとするれば、その反対である「醜」が解らなければならない。特に人間を題材にしたときには、人間の内面に潜むどろどろとした「業」を描くことも必要になるであろう。澤田は幼い頃から貧困と北海道の自然の厳しい寒さに耐えながら苦難に満ちた日々を送ってきたという。そうした自らの体験の中から、見えたものがあるのではないか。だからこそ自分の作品が注目され、売れ始めたことで逆にその表現の本質を見失うことに危機感を抱き身を隠したのではないか。

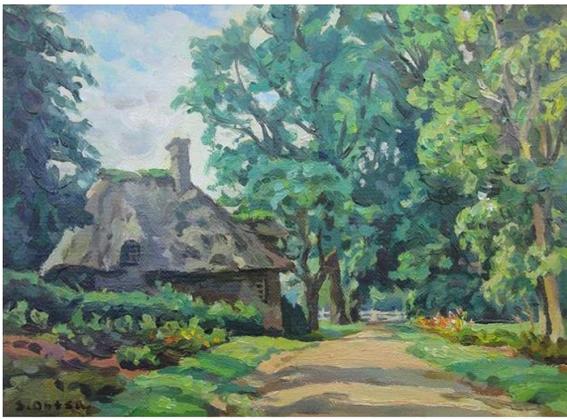
澤田は未だに画を描くもの以外は何も持たず、貧しい生活を続けているという。キャンバスや画帳の裏まで無駄にせず、繰り返し描いた痕跡が遺されている作品が多くみられる。そして自らが極貧の中に身を置きながら社会の底辺で必死になって生きている市井の人々の姿に愛情と限りない優しさを示し、共感を持って描いている。

澤田文一の作品の本当の強さ、魅力はそんなところにあるのではないか。

<談> 秋山：6点あるうちの1点です。澤田はクリスチャン、そのあたりの雰囲気作品に現われている。

鈴木(忠)：自分も澤田の復活は嬉しい、秋山さんのように評価してくれるコレクターが増えると嬉しい、今流行りの写実画(技術)はそれだけの作品です。89年前後にブロードウェイG(森さんはアルバイトで勤めていました)で油絵、素描画を15点購入、コレクションに値する画家です。

### ③ 杉野和夫



大津鎮雄(しずお) 1920-2008年 「マリーアントワネットの山荘(ベルサイユ)」  
油彩・キャンバス F4号 制作年:不詳

1939年日本美術学校卒業、安井曾太郎に師事、1949年日展初入選、1968年日展会員推挙、一水会委員推挙  
1977年一水会常任委員推挙、1986年日展評議員推挙、1991年第23回日展・文部大臣賞、2000年小山敬三  
美術賞

この絵を二年間居間に掛けてはいるが見あきることがない。澄明な素純の快さは、画家の心の澄明さなのか。  
大津は初期から風景、しかも洋風の都市風景を好んで描き、61年のヨーロッパ旅行以降は西欧風景を主要なモチ  
ーフとした。日展、一水会展に出品を続け晩年は次第に西欧の地方都市を好んで描き穏健な写実的画風を示した。  
写実は何も目前の現実を単に再現するわけではなく、あくまで画家の目と心を通した現実であることは言うをまたない。

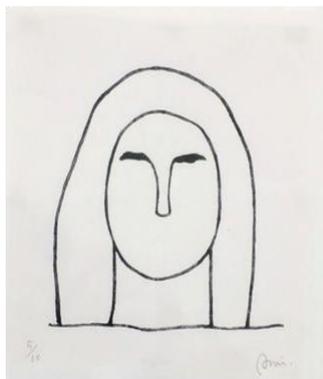
<談> 杉野:サトエ記念21世紀美術館(埼玉・加須)で企画展をやっている。 佐藤:早描きのできる画家。

### ④ 鈴木正道



鈴木治 1926-2001年  
「未」(青白磁) 制作年:1978年

寅年生まれ、1974年(48歳)から数年、干支の置物を制作、伊勢丹  
から限定販売した。私の持っているものは辰、巳、牛、未、申、酉、戌、  
子。鈴木治氏は十二支作らず、寅より子まで、うち亥は作らず。  
八木一夫氏と並ぶ走泥社を代表する陶芸家。(京都美大教授)  
大学退職後、前衛的な作品だけでなく茶の湯にも  
使える古典的な作品も制作する予定であったが  
志半ばにして急逝。  
「小盆ルリ色菊形」(香合)...2000年に購入



荒井雅美 1979年東京生  
2003年多摩美大彫刻家卒業  
「Megu」 木版、墨 制作年:2013年

親友・近衛はなさんの像。荒井さんは2012年1月の放談会で木彫「fの像」  
を紹介された。2013年「わの会」に「f」(木版)を出品された。私はトーマス・  
カボチャラダムス氏の紹介で知る。(氏の弟子にあたる)  
現在アメリカ留学中(アイオワ大)  
近衛はなさん:俳優、脚本家、詩人 俳優・目黒祐樹氏の娘、数年前のドラマ  
「白州次郎」の脚本を執筆(NHK)、1月6日「全力離婚相談」に出演、詩人と  
して2009年「二つの扉」で歷程新鋭賞、英・仏語に堪能な才女とのこと。

⑤ 太田貞雄



鶴田吾郎 1890－1969年「樵」 油彩・板 F4号 制作年:不詳

1890年東京新宿区南榎町に生まれる。倉田白羊に師事する。1905年白馬会研究所に入る。  
1906年太平洋画会研究所に移り中村不折に師事する。1912年京城日報社に入社。  
1915年川端龍子とスケッチ倶楽部を設立。1917年大連、ハルビン、シベリアを外遊する。  
1920年中国、シベリアより帰国。1946年自宅にアカデミー研究所を設立する。  
1955年日本山林美術協会を設立する。  
1969年逝去(享年79歳)

<談> 佐々木:鶴田吾郎の作品ですね。今、新宿中村屋(去年ビルになりグランドオープン)サロンの特別展に鶴田の絵画も展示されています。  
野口 :この作品のオークションに私も参加しました。デフォルメ気味の描写が好きです。

⑥ 伊藤英一



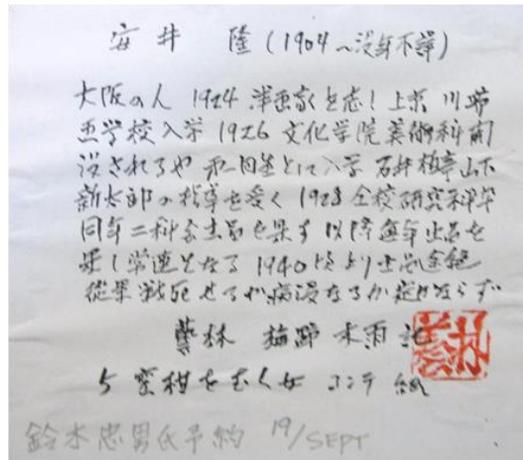
← 作品の左上に書かれた題名、制作年と落款

林 「日假社公」 アクリル・紙 約50×50cm 制作年:1972年

文化大革命が終わって間もない頃の作品です。情景から文革終了後の開放感がうかがえます。  
現在の中国では見られなくなった自転車の列が懐かしく思えます。

<談> 伊藤:以前中国に行った際、現地で購入しました。  
鈴木(忠):後日ウィキで調べたら「公社」は「中国農村に誕生した人民公社」、「假日」は「休日を過ごす」とありました。

⑦ 鈴木忠男



安井隆 1904—没年不詳 「蜜柑をむく女」 鉛筆、コンテ・紙 25×20.5cm 制作年:不祥

藝林にて92年9月に3万5千円で購入。素描展とは初めて最後ではないか。夢二式の顔とか画かれてる事は違うが竹久夢二のニオイがする。影響はされるのだろう。昭和初期、一時の平和な日本の頃、生活家庭婦人の日常のしぐさである。

92年(平成4年)「藝林89号」で舎主の梅野さんは安井隆のことを「藝術を愛し、心の糧としている私にとり見過し出来るものではなく、全素描を買いとり藝林に来ていただく愛好者にも見ていただきたいと思ひ展示することにした。片々たる素描の中にも藝術は生きている。絵は価の高さではなく良いものはまさしく良いのである。」と記している。



⑧ 佐々木征



内田九一 1844—1875年 写真「隅田川の舟遊び」制作年：1872年(明治5年)

明治天皇の肖像写真で知られる写真館主で写真家、日本の写真に貢献したひとり。この写真は2011年3月～8月に富士フィルムフォトサロンで開催された「幕末・明治の寫眞師 内田九一」展に展示された作品と同じもの。作品は当時のフィルム感度ではぶれてしまうので船を浅瀬でいわば座礁させて動かなくして撮っている。古い写真でおもしろいと思う。

1844年長崎生まれ、上野彦馬の弟子となって写真術を習得。1865年大阪で写真館を開業。大阪における写真の開祖とされる。1866年横浜馬車道に移る、さらに1869年東京浅草旅籠町に移り開業。1972年宮内庁の命により明治天皇を撮影、海軍省雇いの写真師として巡航先の風景を撮影する。また九代目市川團十郎、五代目岩井半四郎などの歌舞伎役者や有名芸妓を撮影し商業的にも成功する。

⑨ 堀良慶



安藤信哉 1897-1983年「江ノ島ヨットハーバー」油彩・キャンバス F6号  
制作年：1977年頃

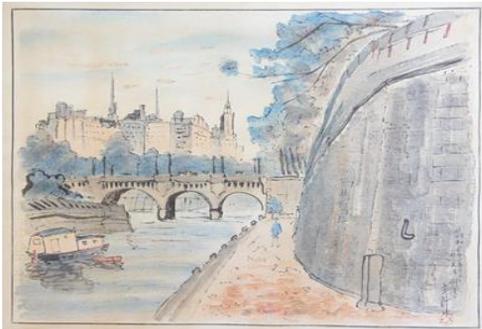
色彩画家らしい、色彩のダンスを見るようです。ボナールの色彩とデュフィ画風、このヨットハーバーは特に等の影響を感じる。プロの技、玄人に好まれる作家だと思います。（私はボナールの色彩が好きです。）

（あんどう・のぶや）千葉県大原町生まれ、3歳の時、父が教員として赴任するため茨城県水海道町に移り住む。一時教職に就くが退職して洋画を学ぶ。本郷、葵橋、太平洋、川端画学校、小林万吾に師事、水彩は板倉賛治に学ぶ。売り絵を描かなかつたため、画商がつかかなかつた。生前の親交により遺族から静岡県K美術館、（2012年閉館）に数十点の作品が寄贈されている。

主な収蔵美術館：茨城県立近代美術館、千葉県立美術館（91年安藤信哉展）、京都市美術館、梅野記念絵画館（藝林で個展）、木更津わたくし美術館、柏わたくし美術館等

<談>鈴木（忠）：元K美術館（三島）の人のブログ「閑人亭目録」は毎日読んでいます。安藤の名前も時々出てきます。

⑩ 野口勉



山岸主計 1891-1984年「セヌ河畔にて」  
木版画 28.4×36cm 自画・自刻・自摺

長野県伊那市出身、木版画の彫り師として修業を積む傍ら西洋画の基礎も習得。1913年から16年まで新聞挿絵の彫りを担当、1926年から欧米各国を旅行し風景版画を多数制作。この作品はこの時期にあたります。これほどの稀少な作品が見向きもされず忘れ去られたのか地方の骨董店で埃まみれになって眠っていました。店主は価値を知らなかったのかとても幸運な価格で購入できました。80年前のセヌ河畔、浪漫的な心をかきたてる風景です。



引札(福神金の蔓・発頭之図 恵比寿天)  
石版・紙 37.5×26cm

埼玉・深谷の雑貨屋橋屋芳太郎が明治期に配った引札です。同じ引札が「埼玉県立歴史と民俗の博物館」に収蔵されています。同じものはおそらく博物館のものとこの引き札ぐらいしか残っていないのではと期待をこめて推測しています。引札は江戸時代半ばに誕生、B4版の大きさの洋紙に印刷され商店の開店広告として使われました。明治時代になり印刷技術が発達すると多色刷りの華やかな「正月引札」が多く作られ年始めに得意先に配るようになりました。その後、大正時代に入ると活版印刷の普及から引札は終焉となります。



<談>鈴木（忠）：引札の資料本は「繁昌図案（エコノグラフィー）・北原照久コレクション」（荒俣宏・編マガジンハウス91年刊）くらいしかない。野口：「引札に見る近世・近代の社会と文化（岩手大・人文社会科学部紀要86号）」資料が参考になりました。

⑪ 佐藤裕幸



武内鶴之助 1881－1948年 「風景」 パステル P10号 制作年:不詳

日光二荒山神社の風景と思われる。

パステルの色を重ねて重厚な表現を追求し、油彩の質感・写実表現を目指した。

<談> 佐藤:パステルは触ると剥がれたりする。額のガラスに貼りついていることもある。  
佐々木:自分は3点持っている。野口:油彩の様な質感がありますね。

文責：鈴木忠男

○次回放談会は平成27年4月に実施予定です。



<編集後記>

新年5日はまだまだ正月気分、京橋駅近くの歩道には  
祝賀イルミネーションが輝き、まるで放談会の作品群に  
拍手を送っているような気分を味わえました。  
今年の放談会もますます充実することを願っています。  
(の)

発行：NPO法人あーと・わの会 通称「わの会」

発行日：平成27年2月吉日

編集：実行委員

佐藤裕幸(司会進行) 鈴木忠男(書記) 野口勉(写真・編集制作)

連絡先：事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶

TEL 04-7134-8293 [ryokeihori@yahoo.co.jp](mailto:ryokeihori@yahoo.co.jp)

発行部数：75部